

なにを捨てますか

ルカ 14 章 25-33 節

14:25 大勢の群衆と一緒に来たが、イエスは振り向いて言われた。

14:26 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。

14:27 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。

14:28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。

14:29 そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、

14:30 『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。

14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。

14:32 もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めよう。

14:33 だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだけ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

<はじめに>

きょうのテキストは読めば意味はわかるのですが、なにを教えているのか、なにを諭しているのかが、よくわからない、その意味で難しい箇所です。ルカの大挿入箇所のテキストでは「終末」に関することが書いてあると、わかりづらい傾向があるようにわたしには思えます。

<構成>

テキストは弟子の条件が三つ、そしてたとえが二つという構成になっています。

弟子の条件（イエスのことばとして提示されます）

- 1) 父母、妻、子ども、兄弟姉妹+自分を憎め
- 2) 自分の十字架を背負え
- 3) 自分の持ち物を全部捨てる

塔のたとえ

物事を始めるにはいくら金がかかるか計算して始める、計算が甘ければ失敗してバカにされる。

戦争のたとえ

戦争を始める前に戦力分析しろ、勝てないと見切ったら外交手段に切り替え軍事行動はするな。

塔のたとえの解説にこのようなものがあつたので紹介します。

「イエスのみ国の使命に生きる弟子道は、人生の一大事業であるから。事前の準備と覚悟、完成への見通しと責任が求められる」新改訳聖書チェーン式の28節注解から引用

もっともな解説ですが、この理解は「できる人」用の理解です。おおくの「できない人」にとっては裁きのことばです。ご立派なお方がこのような覚悟をされるのはおおいにけっこうですが、大きな声でこのようなことを叫ばれると「小さくされた人たち」はおっかなくて逃げだすでしょう。キリスト教の弟子道という捉え方もなんか奇妙なきがします。

<聖書の悪用>

聖書の悪用という見方があります。自己弁護のため、自分の都合のために聖書のことばを利用することです。弁明につかうこともあれば攻撃につかうこともあります。たとえば、きょうの弟子の条件を悪用例としてはこのようなものが考えられます。

- 1) 肉親を憎め=自分の親族、家族を優先するな： なにかを優先させて日曜日の主の礼拝を欠席してはならない。
- 2) 十字架で死刑になった気持ちで主イエスに従え： 教会のいうことを聞け、さからうな。
- 3) 財産は放棄しろ： 教会に献金しなさい。
- 4) 塔のたとえ： 君のやっていることは無鉄砲だ。十分な実力もないのに無謀だ。

聖書のことばを神のことばとして聴くと、こうなるでしょうか。人間なんだから親兄弟とはいえ憎むことがある、かえって人間ならばこそかもしれない。そんな時にはまず主を愛することを第一にきなさい、そこから自分を愛し、隣人を愛するところが必ず生まれてくる。きょうのテキストを素のまま使ったらよい使い方は難しいでしょうね。どうにも悪用に向けたテキストです。

なんでこのようなテキストがルカ福音書に記されているのか不思議です。あきらかに他の聖書にしるされている内容と矛盾します。塔と戦争の二つのたとえばルカ独自の記事です。ルカはこのたとえを使いたいので、地の文、イエスのことば（これは平行箇所があります）を使って編集したような印象を受けます。ひょっとしたら、このたとえばルカが福音書を執筆した当時の時代背景（終末思想に走る原理主義的な一派などに対抗するなど）となにか関係があるのかもしれませんが。だいたい結論の「自分の持ち物を全部捨てる」が先行する、ふたつの語録、ふたつのたとえとのつながりがありません。

<結論の行方>

テキストの結論、「自分の持ち物を全部捨てる」は18章にもあります。ある金持ちの議員は、それができないことを悲しみます。これは議員だけでなく、わたしたち人間にはできないことです。では、イエスに従って命の道を歩むのはどうして可能になるのか、この問いはその議員のことを扱うテキスト（ルカ18:18-30）で答えられることになります。

ちょっと先取りして説明すると、金持ち・貧乏、有能・無能、高学歴・低学歴、などなど人の価値を決める社会的な要因はさまざまあります。また自分の努力ではどうしようもできない要因でもレッテルを貼って区別されます。自分の持ち物を捨てるとはプラス、マイナスをひっくるめて一切合財を捨てるということです。しかし、それが人間にはできません。自分が自分であるためにそれにすがっていないと自我がなりたないからです。この金持ちの場合、財産を寄付することによって神の恩恵を買うことができるのではありません。逆に、財産を寄付することができない自分の無能、無慈悲を知ることによって神の恩恵にあずかることができるのです。このできないことに気づくことが神の恩恵に気づくことであり、イエスの生き方に自分を合わせ従うこ

とができる命の道であると、イエスは福音を語ります。

<さいごに>

ある詩人のエッセイを紹介してきょうの説教をおしまいにします。

はじまりというのは、何かはじめること。そう考えるのがほんとうは順序なのかもしれませんが、しかし、実際はちがうと思うのです。はじまりというのは、何かをはじめるということよりも、つねに何かをやめるということが、いつも何かのはじまりだと思えるからです。

(「すべてきみに宛てた手紙」 長田 弘より)